ネギま！でこのかの妹に!?

ルクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！でこのかの妹に！？

【Ｎコード】
Ｎ７２５１Ｔ

【作者名】
ルクス

【あらすじ】
このかの妹に転生して、陰陽師として原作介入？して、アンチな感じで生きるんや！

はじまり（前書き）

初投稿です。
愛される作品にしたいです。

はじまり

転生というものをご存じだろうか？そう、いわゆるテンプレであるアレだ。

しかし、真っ白の空間や神を名乗るものには出会っていない。

では、何故気付く事ができたか。それは家名が近衛で名がほのか。父様が詠春で、双子の姉がこのかだったからね。

ほのかという名前で性別は女の子です。前世と同じなのは運がいい。それにここはネギま！の世界。退屈はしないと思う。

このかｓｉｄｅ

うちはこのえこのかや！さんさいになってとおさまがよんどるんやけど、ほ～ちゃんがみつからへん。

いつものことやけど、きょうはだいじなことなきがする。

「ほ～ちゃん。どこや～！」

うちがほ～ちゃんをさがしとると、うちのみこさんがこっちにきた。けど、ほ～ちゃんをさがしたほうがいいとおもうんのはうちだけやろか。

「このかお嬢様。詠春様がお待ちですよ。」

「うちはだいじょうぶやから、ほ～ちゃんさがしたってくれへん？」

「ほのかお嬢様なら、私以外が探しておりますので、ご安心ください。」

そういっていつもみつからへんのやけど、うちもそろそろいかへんとめいわくや！

「ん～、わかったえ。ほ～ちゃんのことおねがいな？」

「はい♪では行きましょう。」

おおひろまにつくととおさまがすわってまっとった。ほ～ちゃんはまだおーへん。

「ほのかが見つかるのは、おそらく先になるでしょうから、まずはこのかに話します。」

とおさまがそういって、あいずをすると、みこさんとみたことのないおんなのこがへやのなかにはいってきた。

「この子は桜咲　刹那くん。このか達の友達になる。」

「よ、よろしくお願いします！桜咲　刹那です！」

しょうかいされたせつなちゃんはきんちょうしたようにとおさまにつづく。

「ん～。せっちゃん、よろしゅうな～。うちはこのえ　このかや！このちゃんてよんでな♪」

「あう。こ、このちゃん…？」

「うん！…あと、ここにはお～へんけど、ほ～ちゃんのこともよろしゅうな♪」

「わかりました！」

「けいごもめ～やよ。」

「は、じゃなくて、うん！」

このかｓｉｄｅｏｕｔ

ほのかｓｉｄｅ

なんとなく屋敷の方が賑やかな気がする。今日は特に何もなかったと思う。

「……さ…」

かすかに何か聞こえてくる。今日はお蔵に行くより、メガネのお姉ちゃんのしゅぎょ～を見に行く事にする。

もちろん、こっちでもみつからへんようにせーへんとあかん。

（…最近、無意識のうちにこのかと同じように話しとる気がする。いやゆーことはないけど。）

で、メガネのお姉ちゃんはお札みたいなものを持ってウンウンうなってる。

ウチとしてはここで生きることを決めとるから、原作もあやふや。

つまり、メガネのお姉ちゃんのことはわからないとゆーこと。とは言っても氣を使っているぐらいはわかる。お札にもやもやしたものが見える。

（むむ～。うぬぬぬ～。）

自分の中のもやもやを出すような感じで、メガネのお姉ちゃんと同じようにうなってみる。

「…？だれや！出てきい！」

つい、自分のことに集中してたら、メガネのお姉ちゃんに見つかってしもたようや。かくれている木の陰から顔を少し出すと、目の前にメガネのお姉ちゃんの顔があった。

「ひあっ！？」

「なあ！？」

お互いに変な声をあげて、後ろに転んでしまった。

「あ、あんた、だれや！こないなところで何してるんや！って、そもそもここは結界が張ってあったはずや！」

「えっと、結界はようわからんけど、ウチはほ～ちゃんって呼ばれとるよ？」

「ほ～ちゃん？」

「うん！」

「なら、何でここにおるんや！」

「しゅぎょ～の見学！」

ウチがそういうとしばらく考えるような仕草をしたあと、何かを思いついたような顔する。

「ウチに任しとき！キッチリ教えたる！」

本編はまほらから　（前書き）

千草のしゃべり方が…

本編はまほらから

「ほな、はじめまひょ。まずはウチの名前は天ヶ崎　千草。よろしゅうな？」

「ウチはほ～ちゃんや！」

「……まあ、詳しくききまへん。（変な事に巻き込まれたくはないありまへん。）」

本名を知られると面倒やし、仰々しいのいやや。

「まあ、細かいことは置いといて、まずは氣を覚えんかったらはじまりまへん。ウチの弟子になるんや。そこらのもんらを圧倒できるようになってもらいますえ！」

「はい！」

そういうと近づいてきて、頭に手を乗せてきた。

「？……んっ！」

何かあたたかいものが身体を駆け抜けて、包み込んだ。

「それが氣や。ウチはだいたいこの時間にここにおる。そん時に手ほどきしたる。ちゃんと予習復習しとったら新しいことも教えたる。やから今日は帰り。」

「わかったえ。次に会うときは千草お姉ちゃんがびっくりするぐら

いにがんばる！」

「期待せーへんと待っときますえ。」

結界の外に出ると結構時間が経っていたことを感じる。太陽がほぼ真上みたいだから、お昼ご飯だ。

急いでうちに帰ると、このちゃんに出くわした。

「あ～！ほ～ちゃんや！」

「お昼やからね。」

少しズレているかもしれないけど、このちゃんが言いたいことを先に言う。

「どこにおったん？みんなさがしとったえ？」

「お散歩やよ。…で、後ろの子は？」

「せっちゃんや！」

「桜咲　刹那です。よろしくお願いします。」

「ん～、よろしゅうな。ても、敬語はバツやね。ウチはほ～ちゃんでええんよ？」

「うん！」

このちゃんと違って顔がころころ変わって面白い。

「じゃあ、このちゃん。せっちゃんといっしょにご飯食べよ？」

「あっ！それええなあ！」

「（あ～んとかしたら、せっちゃんのかわいいとこ見れそうやね。）」

「よ～し！けっていや！」

お～って感じに手を上げると、ウチと状況についていけずにおろおろしとるせっちゃんの手を握って、広間のほうに引っ張って行く。

「せっちゃん。このちゃんのことよろしゅうな。基本的にさびしがりやからね。」

「うん！もちろんや。」

「ウチは基本的にふらふらしとるから、ほどほどに。」

「うん。」

「ついた！きょうから、せっちゃんもここでいっしょにお昼やからね！」

刹那ｓｉｄｅ

このちゃんに連れられて外に出ようとしたら、その人と出会った。一瞬、このちゃんと見間違ったくらいそっくりで、この人がほのかお嬢様だと思った。

あいさつを交わして、自分予想が正しいことを確認した。

話しながら返事を返していると急に背中が寒くなった気がした。そのことを考えていると、いつの間にかいっしょにお昼ご飯をたべることになっていて、このちゃんに連れて行かれる。

その時、ほのかお嬢様…ほ～ちゃんと目があった。

「せっちゃん。このちゃんのことよろしゅうな。基本的にさびしがりやからね。」

「うん！もちろんや。」

ほ～ちゃんはどことなく一歩引いたような感じやけど、優しい方だ。これからもしっかり御守りできるようにならんとあかん。

刹那ｓｉｄｅｏｕｔ

川は五歳で、今三歳。（前書き）

ここからは少しキンクリしていく予定。

川は五歳で、今三歳。

千草ｓｉｄｅ

ほのかお嬢様と出会って三月経った。ほのかお嬢様だとわかったのはひと月前。ウチが一条はんのところに仕事の報告しに行った時に、一条はんから聞かされた。　確か、長はお嬢様達には裏のことは話さんようなことをのたまっていたはずや。その時は……

「ほのかお嬢様には今までどおりしておけ。お嬢様は長が隠していることを気づいているふしがある。」

「なっ！て言うても三歳らしい感じですえ？」

「ほのかお嬢様が蔵で本を読んでいる姿を見ればその認識は変わらざるをえない。気配を消していたワシに気づいて、さらに陰陽道のことを質問するものをただの三歳だとは思わん。」

「そういえば、ウチの結界もウチに気づかれずに突破されましたわ。偶然やと思おてたけど…それも？」

「おそらくな。ほのかお嬢様には実践だけ教え、そのことは報告しろ。それができるようにしてやる。しばらくは、それがお前の仕事だ。」

「まあ、お嬢様に教えたるんは楽しいから了解どす。」

「それと、お嬢様には向こうが聞いてくるまで気づいてないふりをしておけ。それ以外はお前に任せる。」

こんな感じやったと思う。お嬢様は気づいているか聞いてこーへんねんけど、あれは絶対気づいとる。それでいて他のもんには三歳らしい感じで接しとる。ほんまに食えへん人や。
ほのかお嬢様が長になるんやったら、ウチもしっかり仕えると思うわ。

千草ｓｉｄｅｏｕｔ

ほのかｓｉｄｅ
氣の扱いも千草お姉ちゃんに合格をもらった。後は実践だけやけど、千草お姉ちゃんは符術士やから、符術での効率的な使い方を教えてもらっている。
それ以外の陰陽師の術は蔵で仲良くなった、一条さんに教えてもらってる。
今は一条さんにウチなりに考えた方違えの術を構築してもらっている。

「ふむ。方違えの術式は昔から使いやすいように改良が繰り返されておる。ほのかお嬢様が考えられたのは、京を守る者の術ではなく、到達点である根源を見据えた術式じゃ。」

この会話からわかるように一条さんにはウチのことはばれとる。千草お姉ちゃんにもばれとるのはわかってんのやけど、聞くことはないと思おとる。
で、ウチの術式は通常のものやない。普通の方違えは、あの方角はちょっと不吉やから、違うとこから行こか。って感じの占いのようなもの。で、ウチのは術式を組んで、禍福を操作したりするものや。究極的には一条さんの言うように根源に類するものもできるようにしたる。

簡単に言うと禍福を操作するということは、因果律を操作するということ。つまり、アカシックレコードのような感じ。

「ほのかお嬢様には歴代の長達よりも膨大な氣がある。これを自由自在に使いこなしたならば、それもできるじゃろう。術式の方はすでに考えられたのであろう？」

そう言ってニヤリと笑うのは無邪気な少年のようだ。

「むう。…まあ、できとるけど。」

「よろしい。今日はお嬢様の苦手な五行の訓練をしましょうか。」

「えーっ！」

「五行は陰陽道では基礎です。方違えのためと思ってしましょうか。」

「はい。」

一条さんとの勉強を終えると、次はこのちゃんとせっちゃんと遊ぶために二人のところへ行く。

いつもよりも静かやと思おたら、二人とも縁側で気持ちよさそうに眠っていた。ウチも疲れとったから、二人のとなりに寝転ぶ。

春も中頃でポカポカ陽気で、まぶたが重い……。

ほのかｓｉｄｅｏｕｔ

このかｓｉｄｅ

せっちゃんといつもようにあそんどってすこしきゅうけいしとると、ねむと～なってきていつのまにかねむってしまったようや。
で、おきたらうちのとなりにほ～ちゃんがかわいいねがおでねむとった。
あまりにもかわいいからほっぺたをツンツンしてたんや。そしたら、パクッとうちのゆびを…

「！！？！！！」

こえをあげそうになったけどガマンしたえ。うち、ようやった！

今は四歳。関西弁以外鬼はいるの？（前書き）

サブタイトルと話は関係ないです。

今は四歳。関西弁以外鬼はいるの？

ほのかｓｉｄｅ

最近、父様の機嫌がいいような気がする。やけど、父様に聞いてもちゃんと教えてくれへんやろーから、一条さんに聞くことにした。

「ふむ。ほのかお嬢様には裏の世界の話したじゃろう。この関西呪術協会は大きく分けて三つの派閥がある。一つは長の恭順派。これは一番少ない派閥じゃ。そして、もう一つは保守派。これもそれほど大きくない。最後はワシ達の派閥じゃな。周りは過激派と呼んでおる。

それでの、ワシ達が活動を全くしてないからじゃ。」

「へ～。なら、外に出かけられへんかな？」

「ふむ。長に聞いてみてはどうじゃ。護衛で千草が行けば、大丈夫かもしれん。あ奴は、ほのかお嬢様の訓練と自分の訓練だけだったからの。保守派と思われとることじゃろう。」

「聞いてみる！千草お姉ちゃんと旅行や！」

一条さんのところから飛び出してみたけど、父様のおる場所がわからへん。まあええ、片っ端から探すことにする。

結局、父様を見つけたんは夕食の時やった。千草お姉ちゃんと二人で行くんやったらこのちゃんとせっちゃんがおったらあかん。このちゃんが眠ったら父様のところに行くことにする。

目を覚ますととなりにこのちゃんがいる。つい、このちゃんの体が温かくてぐっすりとねむってしまったようや。
どうやって、父様に話すかを考えるためにも井戸で顔を洗う。
別に水道のでもいいけど、鍛錬にもなる気持ちいい。

「ほのかはん。おはようさんやね。」

顔を洗っていると千草お姉ちゃんが声をかけてきた。お姉ちゃんも井戸を使っているらしいけど、ウチのことは気づいてない設定やった気がする。

「千草お姉ちゃん。ウチのことわからへん設定やったんちゃうん。」

「……そうやったな。まあええ、互いに気づいてましたやろ？」

「…いいんやけどね。いままでどおりでお願いやよ？」

「ん。任しとき。今までどおりビシバシ鍛えたる！」

ほのかｓｉｄｅｏｕｔ
千草ｓｉｄｅ

半分ねむとったせいで、とんだミスをしてもうた。まあ、お嬢様も、たいした反応してこーへんかったんやし、結果オーライやろかな。
そういえば一条はんからお嬢様との旅行を長はんに話すように言われとる。お嬢様も多少大人びとるけど、まだまだ子供や。いや、なまじ大人びとるせいで、話しかけずらいんかもしれん。
いっちょ、ウチが場を整えてあげまひょ。

千草ｓｉｄｅｏｕｔ
ほのかｓｉｄｅ
千草お姉ちゃんと井戸で会って、朝食を終えた頃、父様に呼ばれて父様の仕事部屋にやってきた。
で、父様の前に座るとおもむろに口を開いた。

「ほのか。先ほど、千草くんと話しをしていてね、ほのかに屋敷の外をよく知るのも勉強だという話しになってね。ほのかに興味があるのならそれもいいかと思ってね。ほのかはどうしたいかい？」

どうして千草お姉ちゃんがその話をしたのかは気になるけど、渡りに船や。まあ、気になることは他にもある。

「ん～、このちゃんとせっちゃんは？」

「二人は外のことは興味がないみたいですね。（二人にとっては、ほのかの誕生日の準備のためにもちょうどいいのでしょう。）」

「そうなんか。まあええ、千草お姉ちゃんと二人で旅行や。」

「まあ、いろいろと準備もあると思いますので、千草くんとよく話をしておいてくださいね。」

「おっけーや！お土産も期待しとってな。」

それから数日後、このちゃんとせっちゃんと父様と巫女さんたちに見送られて旅行に出発した。

旅行は修行で。あと、誕生日。（前書き）

お気に入りが５０件。ありがとうございます。

旅行は修行で。あと、誕生日。

ほのかｓｉｄｅ

旅行の行き先は表向き、温泉地や。でも、今回は修行しにきたんや。でもな、もっと普通の場所やと思おたら、地図上にない無人島で、千草お姉ちゃんが言うには霊脈の真上らしく、符術で呼ぶ妖怪たちの異界との接点らしい。

で、ここで妖怪たちと過ごしながら、氣の使い方を学ぶということらしい。

「妖怪と陰陽師って仲良いん？」

「いろいろどすな。一条はんが言うには、若いもんは自分たちが正義で妖怪たちが悪とか言うとるらしいけど、ウチはそうは思わん。棲み分けができとれば悪とか正義はないと思おとる。」

「やったらお土産持ってきたんは正解やったね。」

「その大きいリュックやね。なにが入っとるんや？」

「父様の秘蔵のお酒。竜宮とかオロチ。」

「……」

ウチがお酒の名前を言うと黙ってしもた。味とかよう知らんから、なんかビンに術式が入っとるものを持ってきたんやけど、まずかったんやろか。

「えっとな、いずれウチかこのちゃんが継ぐんやから、先にもらっ

てもええと思わん？あ、あと、ホコリかぶっとったからいいかな～ってな。」

あはははって笑って、ごまかすと千草お姉ちゃんはため息をついて、何度かうなずく。

「まあええ。妖怪たちは宴会好きや。いい土産になるやろ。…っと、そんなこと言っとるうちにつくようやな。」

島の真ん中あたりの空き地に、折り鶴の乗り物が着陸（？）すると、ちらほらと鬼や狐のお面をつけた人（？）が現れた。

千草お姉ちゃんが降りると、狐のお面の人が声をあげる。

「お？千草嬢ちゃんやん！美人になったのう！後ろのちっこいのは？」

「ウチの弟子で近衛　ほのかや。氣の扱いやったらここやと思おたんや。」

千草お姉ちゃんの紹介で周りの視線がウチに集まる。

「なのかの娘か？」

誰かがお母様の名前を言う。

「お母様のこと知っとるん！」

「よう知っとる。」

答えたのは、ウチなんてひと飲みにできる大きな狼やった。

「教えて！…えっと、狼さん？」

ウチがそう言うとあたりが静まり返った。でも、しばらくしたら、笑い声が聞こえてきた。

「くくくっ。わあっはっはっは！なのかの娘だな。間違いないわい！あ奴はなわしに会うとわんちゃんと言って、抱きついきたんじゃ！くはははっ！今宵は宴会じゃ！」

「「「オオオォー！！」」」

次の日から修行が始まった。千草お姉ちゃんは二日酔いでお休み。

「氣の使い方を教えるのはこの玉藻御前さまだ。気軽にタマモと呼ぶがいい」

ウチの前に現れたのは狐の耳としっぽのお姉さんだった。

「タマモ…さんって、割れた石を集めてるんやないの？」

「ああ、あんなもん一刻もあれば十分だ。あたしを過小評価しすぎだろ。

まあいい。修行だろ？今からやることなすこと、氣を全力状態でやれ。氣ってもんに慣れてないから使いにくいんだよ。息するのと同じように氣を使えるようにする修行だ。

と言っても、簡単には無理だろ？これをつけておけ。それで一日中過ごせ。」

渡されたのは黄色い毛で編まれたミサンガみたいなものや。つけ

てみると…

「！」

強制的に氣が全力状態になる。これ、スッゴくキツイ。修行やから当たり前やけど、いつもの比やない。

修行はこのままの状態で二日間を普通に過ごしただけだった。タマモさんのお世話して、タマモさんのお世話をしたくらいや。

そんなこんなで旅行の期間は終わりで、帰る前に宴会をして、タマモさんとねむって次の朝に島でた。途中で温泉饅頭とかお土産を買って帰路についた。

ほのかｓｉｄｅｏｕｔ
このかｓｉｄｅ

さっき、ほ～ちゃんからお昼くらいに戻ってくれことを聞いた。今からうちがほ～ちゃんの誕生日のお祝いの料理を作り上げるんや！

このかｓｉｄｅｏｕｔ
ほのかｓｉｄｅ

屋敷に戻ると、いつもの巫女さんやなくせっちゃんが出迎えてくれた。もちろん千草お姉ちゃんも一緒や。

広間に入ると、豪勢な料理が並んどった。せっちゃんの案内で席につくと、このちゃんが隣に座る。

いつも以上に、ニコニコしとるこのちゃんの隣でいただきますをして料理を食べる。

「おいしい？」

不意にこのちゃんがウチに味を聞く。

「うん、おいしいえ。ほんのり甘くてウチ好みの味や。」

「これな、うちが作ったんや。ほ～ちゃんの誕生日のお祝いや！」

「わー！ありがとな！このちゃんの手料理、めっちゃうれしいわ！」

「ほ～ちゃんに喜んでもろてうちもうれしいわ～。」

「なら、ウチからもプレゼントや。」

あの島で手先の器用な鬼のあんちゃんに手伝ってもろた、透き通った琥珀のネックレスを取り出して、このちゃんの首にかける。

「誕生日、おめでとうな。」

「ふえ？」

「このちゃんは、しっかりしとるようやけど、ときどき抜けとるな。ウチらは双子なんやから誕生日は一緒やよ？」

「あ、そやった。」

そこからはいつもの誕生日のように騒いで、このちゃんと二人で眠った。

やっと、五歳。心の悲劇はめっ！（前書き）

お気に入り９５件。ありがとうございます。もう少し、本編は先かもしれないです。

やっと、五歳。心の悲劇はめっ！

ほのかｓｉｄｅ

春が来たような来ないな今日この頃、やっとウチの方違えが切り札になってきた。そのおかげで、他の陰陽道の術は基礎を繰り返している感じや。

でも、これでせっちゃんの隠し事となんとなく覚えてとる、川でのことを助けることはできへんやろうけど、せっちゃんの心を助けることはできるかもしれへん。

ということで方違えを使ってせっちゃんが一人で剣の素振りをしてるところに来た。

「せっちゃん、おはようさん。」

「あっ、ほ～ちゃんもおはようござっ！？」

ウチにあいさつを返そうとしたときに、せっちゃんの背中に真っ白な白い翼が現れた。

「…ぁ、う、うちは！」

錯乱してここから立ち去ろうとしたけど、足がもつれてこけてしまう。

「む？せっちゃん、こんなにきれいなもの隠しとったん？」

「ち、違う！こんなん！このちゃんにもほ～ちゃんにも嫌われるもんや！！」

せっちゃんでも、言っていいことと悪いことがある。お姉様がそんなことで嫌いになるはずないわ。ボケが！

「ウチのお姉様がそんなことで嫌いになると思おとるん？」

「ひっ！」

ずいぶん低い声がでた。こんなに怒ったんは、初めてや。

「どうなん？返事せーへんの？やったらウチにも考えがあるえ？」

「あ、あぁ。だって、う、うちは禁忌やし…」

「お姉様のこと聞いとるんやけど？」

「う、うちかて、でも、怖いんや。初めての友達やし…」

このくらいでええやろ。でもウチらに隠しとったんは気に入らん。

「なら、ばつとして、このちゃんにもちゃんと見せるんや。それで許したる。」

「でも！」

「おねしょ。鶴姉にばらす。」

ウチがぼそっとつぶやくと、ビクッとしてウチの方を涙目で見る。

「このちゃんにもちゃんと見せる。」

「よろしい。」

ほのかｓｉｄｅｏｕｔ
このかｓｉｄｅ

朝起きて見るとうちの目の前にせっちゃんが正座しとった。隣にはほ～ちゃんもおる。

「二人とも、おはようや。…で、どうしたん？」

「せっちゃんがウチらにきれいなもの隠しとったんや！」

そういうほ～ちゃんの顔は怒っとるように見えるけど、絶対笑っとる。うちにはわかる。

「せっちゃん、うちだけ仲間はずれなん？よよよ～。」

うちもほ～ちゃんに乗って泣きまねをする。

「ち、ちがう！」

そう言って、意を決したような感じで息を吸う。
そしたら、せっちゃんの背中に天使みたいなきれいな白い翼が現れた。

「…きれいな翼やね～。天使みたいや～。」

うちがそういうとせっちゃんが抱きついてきた。

「せっちゃんは甘えん坊さんやね～。うちはせっちゃんを見た目だけで、すきなんちゃうんやよ？ほ～ちゃんもや。そうやろ？」

「当然！せっちゃんはウチらがお嫁さんにもらうんは決定しとるんや。そんなことときにせーへんでいいんや。」

「え？う、うち。」

「あかん。決定事項やから取り消しは無理や。」

そう言って、ほ～ちゃんと笑いあう。

「か、からかわんといてよ！」

「そういうことやし、うちらは友達なんやから、もっと頼っていいんよ？」

「うん！ありがとう！」

せっちゃんとうちらの絆が深まったとうちは思う。

このかｓｉｄｅｏｕｔ
刹那ｓｉｄｅ

朝の鍛錬をしていたら、いつの間にかほ～ちゃんが近くまで来とった。

それであいさつを交わしているときに、なせか禁忌の白い翼が飛び出してきた。

とっさに逃げようとしたけどうまくいかず、うちがいろいろ言った瞬間、すごい寒気がした。

ほ～ちゃんの方を見ると神鳴流の鶴子さんの本気の時の、白目と黒目が反転しとるほ～ちゃんがおった。

そのあと、このちゃんにも翼のことを教えることになったけど、二人とも、うちを嫌わんでくれた。

これからはこのちゃんにもほ～ちゃんにも頼っていけるようにする。うちはまだまだ弱いんや。

でも、ほ～ちゃんだけは怒らさんようにする！

刹那ｓｉｄｅｏｕｔ
ほのかｓｉｄｅ

せっちゃんの秘密をこのちゃんにばらして、しばらく経って二人の親密度がパワーアップしとる気がする。で、聞いて見ると、このちゃんが川に落ちたようやけど、せっちゃんが翼で飛んで助けたようや。　もちろん、仲はいいみたいや。

そのあと、ウチが仲間はずれなん？って泣きまねをすると二人が抱きしめてくれたから、よしとする。

六歳！このちゃんは麻帆良へ。ウチらは…（前書き）

少し書き方変えてみました。それほど変わりはないです。

六歳！このちゃんは麻帆良へ。ウチらは…

ほのかｓｉｄｅ

六歳になって、このちゃんは麻帆良の小学校へ行くことになった。せっちゃんは神鳴流の修行があるから、中学になってから麻帆良に向かうらしい。

ウチは関西呪術協会の上のゴタゴタで、こっちに残るようや。

「ほ～ちゃんともお別れなん？」

このちゃんは涙目でウチに聞いてくる。

「んー。ウチも一緒に行きたいんやけど、（父様がヘタレやから）一緒に行けへん。」

「うー。」

「おっきい休みには戻ってくるん？」

「当然やえ。父様とも約束したんやし。」

「なら、ウチはこのちゃんが戻ってくるんを待っとるな？せっちゃんにもちゃんと勉強教えるから安心してな。」

ウチがそういうと、隣で涙目ウルウルしとるせっちゃんはビクッとして、あさっての方を見る。

「せっちゃん。勉強、頑張ってな？うちもがんばるから。」

「う、うちもがんばるえ。（たぶん）」

このちゃんは最後はニコッと笑って車に乗った。ウチら二人は車が見えへんくなるまで、手を振った。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ウチの修行は、千草お姉ちゃんから一条さんにみてもらうようになった。千草お姉ちゃんも自分の修行と、仕事があるから一区切りついたところで、自分のことを中心に戻したみたい。

一条さんは時々、ウチの修行をみて改善点を教えてくれる。やから、ウチは一人での修行に移ったいうことや。

せっちゃんの勉強の方は、なかなか難しい。修行のことで頭がいっぱいで勉強の方は頭にない。

このままやったら、このちゃんとの約束を果たせへん。そのためには外堀を埋めることにする。

屋敷から少し山の方にある神鳴流の道場にきた。目的は鶴子さんやね。神鳴流最強で、せっちゃんの目標。おまけに頭もいい。ウチには無理でも鶴子さんならできるかもしれへん。

で、その鶴子さんを探していると後ろにかすかな気配を感じて、振り返ってみるとウチの目的の鶴子さんやった。

「ほう？うちの気配に気づくいうことは、ただのお嬢様やないことやね？」

怒っとるようには見えへんけど、嘘をついたらいろいろとあぶない雰囲気や。

「えっと、せっちゃんのお師匠さん？」

「そうや。…けど、うちの質問には答えへん、なんてことはありまへんよねぇ？」

ごまかしも無理なようや。

「……陰陽術はたしなめとるえ。」

「ふーん？それだけやありまへんやろうけど、今はいいどす。それで、どないしてうちを探してはりましたん？」

「せっちゃんに勉強をしっかりするように、鶴子さんに言ってもらえへんかなーって。」

「それぐらいならかまへんよ？素子のかわりに刹那をしごかせてもらいます。」

「はい。おねがいします。」

心の中でせっちゃんを応援して、帰ろうとしたら鶴子さんに呼び止められた。

「お嬢様。ついでにお嬢様も氣の扱い方の修行を行いましょ。」

「えっと、ウチは用事が…」

「詠春はんにばらしますえ？」

「…ご指導のほど、おねがいします。」

「ほな、行きましょか。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

鶴子さんについていくと、せっちゃんが一生懸命に素振りをしていた。いつもの可愛らしさやなくて、凛々しさがキュンとくる。

「さて、次は技の修行に入りますえ。」

「はい！……ほ～ちゃん！？え、えっと、うち……」

「落ち着きなはれ！ほのかお嬢様は関係者どす。」

「ふえ？」

いきなりのカミングアウトにせっちゃんがウチの方を見る。ウチはついっと目をそらす。

「氣や術の実力なら、お嬢様の方が上や。刹那は剣の合間にもっと勉強せなあきまへんな。ということで、うちが剣と勉強を徹底的に鍛えるさかい、覚悟しなはれ。もちろん、お嬢様にも手加減しまへん。」

こうして、この日から鶴子さんにしごかれる日々が始まった。

六歳！このちゃんは麻帆良へ。ウチらは…（後書き）

感想をいただきました。ありがとうございます。できる限り、問題点は改善させていただきます。

七歳！せっちゃんと初めての…（前書き）

詠春のアンチが入ります。

七歳！せっちゃんと初めての…

ほのかｓｉｄｅ

「あ、あああぁあ！」

「せっちゃん！大丈夫や！ウチはせっちゃんを離さへん！」

そう言って、刀（夕凪）を持って震えるせっちゃんを抱きしめる。

ウチらの周りには何体もの死体が転がっている。

ウチらが自主錬をしとったら急に現れて、襲ってきた。それをせっちゃんが撃退したんや。けど、せっちゃんにとって初めての人斬りで、パニックになっとる。

せっちゃんが落ち着くまで、抱きしめることしかできへん。

しばらく抱きしめているとせっちゃんの震えもおさまってきた。

「せっちゃんはウチを守ってくれんや。今はそれ以外のこと、考えんといて？ウチはせっちゃんの気の済むまで一緒におるからな？」

「うん。ありがと。…もう少しだけ、このままおってくれる？うち、がんばるから。」

「しばらくはせっちゃんを一人にせーへんよ？久しぶりにせっちゃんとお風呂や。」

「か、からかわんといて。…でも、ありがと。」

「うん。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

よるになって、せっちゃんが眠る隣で今日のことを考える。
ウチがもっとしっかりしとったら、せっちゃんにあんな思いをさせへんかったんちゃうんやろか。ウチの方違えが完璧に発動しとったら、勝手に自爆してくれたはずや。
ウチもしっかりせなあかん。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

せっちゃんが持ちなおすまでひと月かかった。ウチもそのあいだに人を殺すことを経験した。けど、せっちゃんみたいにはならへんかった。直接人を殺すことをしてへんからやろか。
あの日からウチらの修行は実戦もするようになった。その時は一条さんがうまくやっとるようで、父様だけが知らないようになっとる。
このちゃんはあまり帰ってこーへんけど、手紙はくる。友達ができてウチらも紹介したいらしい。
千草お姉ちゃんに聞いた話やと、このちゃんのおる麻帆良では、結界に囲まれて、不都合があれば記憶を書き換えられるようや。このちゃんが戻ってきたら、裏のこととか、陰陽師や魔法のことを教え方がいいかもしれへん。
もし、お姉様に手を出しとったら、麻帆良で都落としの術式をしたる。
夏休みになってもお姉様は帰ってこーへん。不安感からか術の制御がうまくいかへんくなってきた。
ちょっと前なんか、方違えの術が暴走して屋敷の結界が崩れて、屋敷中が騒然とした。その騒動が原因で父様にウチが陰陽術を使えることばれてしもうた。

ほのかｓｉｄｅｏｕｔ

詠春ｓｉｄｅ

それは突然の出来事だった。いや、今にしてみれば兆候あったはず。それを私は見逃してしまった。　とにかくそれは突然だった。

関西呪術協会の結界を信頼……過信していたのでしょう。

氣や魔力などで身体強化をしている者、またはそのような術を学んだ者にはよくわかる、結界が崩れる音。金属を擦る甲高い音。

そして、あたりが静まり返り、その後、各々が武器を持ってあたりを警戒する。

ここの結界は京都の霊脈を利用して張られている。それを崩すには一線級の力量が必要だ。

しかし、しばらくすると一条殿が式紙を用いて今回ことを説明しだす。そして、私のもとにほのかを伴って一条殿が詳しい説明をしにきた。

要約すると、ほのかは裏のことを知っていた。そして、ある術に関しては一線級の実力を持っている。ほのかは最近、精神が不安定になっていて、術を暴走させた。その結果が今回のことのようだ。

ほのかの術のことを聞こうしたが、ほのかは何も話さない。考えてみれば、食事以外でこうして顔を合わすのも久しぶりのような気がする。私はほのかのことを見ていただろうか？

このかのこともそうだ。大人の都合で姉妹を引き離したのではないだろうか。

その日ほのかと共にいたが、私はほのかと向き合っていたのだろうか？

詠春ｓｉｄｅｏｕｔ

ほのかｓｉｄｅ

父様にはばれてしもうた。やけど、父様は何も言わへん。

このちゃんに会いたい。

まだ、七歳！このちゃんの帰省（前書き）

ちょっと無理やりかもしれないです。

まだ、七歳！このちゃんの帰省

このかｓｉｄｅ

せっちゃんから手紙をもらってほ～ちゃんが寂しかっとることを聞いた。

うちも何度か帰ろうとしとるんやけど、いつも用事が入る。おじいちゃんもあてにならへんし、自分でなんとかせなあかん。

幸いにもお小遣いもあるし、行き方もわかる。準備をこっそりやればええ。

向こうにも着替えとかはあるから最低限の荷物だけ持って電車に乗り込む。新幹線は自由席分だけ買って乗り込む。新幹線に乗ったらこっちのもんや。

――――――――――――――――――――

何事もなく家に着いた。ほ～ちゃんは…たぶん、湖が見える丘におると思う。

うちの予想は大正解やった。でも、調子が悪いのは本当みたいや。いつも後ろにこっそりいっても見つかるんやけど、今は、全然気づいてへん。

「ほ～ちゃん！どうしたん？」

うちが話しかけるとばっという感じで振り返って、うちの方を見つめてくる。そんで、だんだん涙がうるうるしとる。

「…お姉様。お姉様！」

急に抱きつかれて驚いたけど、これ以上寂しい想いをさせへんかったんは良かったと思う。

「うちもほ～ちゃんに会いたかったんやよ？久しぶりのほ～ちゃんもかわええな。」

「おかえり、このちゃん。せっちゃんにも教えたらな。」

「そうやね。せっちゃんとほ～ちゃんと洗いっこしやなな～。」

それから、ほ～ちゃんに引っ張られながら屋敷向かったんや。

このかｓｉｄｅｏｕｔ

ほのかｓｉｄｅ

このちゃんはウチらをなぐさめたら父様のところへ向かった。もちろんウチらも一緒や。やけど、このちゃんの雰囲気がちょっと違うような気がする。

広間に着くと、いつもなら父様に抱きつくとこやけど、今回のこのちゃんはそうせーへん。

「父様、うちな、父様がうちらに隠し事しとるん気づいとるよ？」

「！」

そこまで顔を強ばらさせなくてもええと思う。それじゃあ、何か隠し事をしとるって言うとるようなもんや。

「うちらのことを思って隠しとるんはわかるえ？でもな、うちらは何にもわからんわけちゃうんやよ？」

「……」

「……」

「…わかりました。話しましょう。ですが、このことを知るということはいままでの世界とは違ってくるということですよ？」

「覚悟はできとるえ。ほ～ちゃんたちも知っとるようやし。」

「「あ。」」

「二人とも、後でＯＨＡＮＡＳＨＩやよ？」

「「…うん。」」

その後、父様が陰陽師のことや関西呪術協会のことを話して、このちゃんの魔力と立場のことを話した。もちろん、魔法使いと麻帆良と二つの組織の関係と、このちゃんを麻帆良に送った理由についても話した。

話を聞いたこのちゃんは呆れたように父様を見る。

「…父様、うちらのこと考えてくれとるんはようわかったけど、いきあたりばったりはあかんと思うえ？

ここは組織なんやからうちらが大人になってから知っても遅いえ。それに周りの人にも迷惑や。しっかりせなあかんえ。」

「……」

さすがに父様も言い返せへんかった。結果として、二人とも黙る。

「あー。このちゃんは今日は急いで来てくれたんやから、ゆっくり

してな。」

「そうやね。二人にも聞きたいことあるし。ほ～ちゃんの部屋に行こ～な。

父様もさっきの話、ちゃんと考えなあかんえ。母様を安心させたらなあかん。」

そして、ウチらを連れて広間を出る。その後は、このちゃんにじっくりお話された。

八歳！前鬼、後鬼。（前書き）

中途半端です。次回は回想の話しです。

八歳！前鬼、後鬼。

ほのかｓｉｄｅ

このちゃんに裏のことを話して次の年、このちゃんは休みには帰ってきて、陰陽術を吸収していった。で、このちゃんは治癒の適正が高くて、逆に攻撃の適正は低かった。

で、いざというときの為に五行の練習もしとるんやけど、万全を期して、前鬼・後鬼を契約することになった。

期間としては一年を考えとる。このちゃんが勉強で余裕のあるあいだと、呪符使いの千草お姉ちゃんが自由に動ける期間やからや。

「さて。まずはこのかお嬢様がどんな妖魔を式紙として扱うのか聞いときます。」

「うちな、お犬さんがええな～。ほ～ちゃんはどう思う？」

「玉藻…九尾とか、酒呑童子かな。」

「無理どすな。玉藻御前はともかく、酒呑童子は酒飲みで勝たなあきまへん。」

ウチの提案は即却下のようや。

「犬…大神やったら？あの島でお願いしたらええかも。」

「そうどすな。このかお嬢様なら、気に入られるかもしれまへんな。」

「ほ～ちゃんもそこでお願いするん？」

このちゃんが言った瞬間、千草お姉ちゃんが目をそらした。

「？」

「ほのかお嬢様は式紙はダメどす。」

「いじわるするん？」

このちゃんは千草お姉ちゃんを睨むけど、ウチが止める。

少し前にウチがやりすぎたことを話す。

「簡単に話すと、ちょっと前に大量の妖魔が暴れて、ウチが結界で閉じ込めて、都落としの術でやっつけたんやけど、ついでに都喰らいもしたから謹慎中？」

「ん～。なんとなくわかったけど、やりすぎってわざとやろ？」

「試してみたらうまくいっちゃって。おかげでウチも強くなれたんやけど。」

「む～。ほ～ちゃんに負けてられへんな。千草はん、よろしゅうな！うち、がんばるえ！」

ーーーーーーーーーーーーーー　以前、氣の修行をした島に着くとこのちゃんが昔のウチみたいに妖魔と仲良くなった。

やけど、タマモさんと狼さんがウチを見て警戒しとる。

「あー、ほのか。少し話しがある。あたしのねぐらまでこい。」

ウチの返事を聞かずに森に消える。

「そういうことみたいやから、このちゃんのことお願いやえ。」

「もともと、このかお嬢様はうちが鍛えることや。安心して行きなはれ。」

「うん！」

タマモさんのねぐらにつくとタマモさんが目の前に現れて、ほっぺたをつかんできた。

「ひゃひふふん？」

真剣な顔でそんなことするもんやから、ウチも真面目に返したらこんなんになってしもうた。

「何があった？気配が変わりすぎだ。」

タマモさんの雰囲気は真面目や。怖いくらいに真面目や。でも、ウチのことは一条さんと父様の二人が揃ってしゃべったらあかんっていっとった。

「ウチの式紙になってくれるんやったら話すえ。千草お姉ちゃんも詳しいことは話してへんのや。」

「いいだろう。ここはヒマだからな。あたしにとっては楽に外で暴れられるしな。」

そう言って、ニヤリと笑う。

式紙の契約で必要な血の交換をして、召喚と送還をして契約がきちんと結ばれとるか確認して、ウチは話し始める。

〜回想〜

八歳！やけど七歳。（前書き）

番外編のような感じかもです。

八歳！やけど七歳。

〜回想〜
このかｓｉｄｅ
このちゃんに裏のことを話してからは、このちゃんの修行が中心に行われた。ウチも今は実戦で技術を磨いている。

ウチの方違えは禍福を弄ることが多くて、集団戦では補助にまわる。そして、ウチが補助にまわると全体的に死傷者が少なく、いろんな仕事で重宝されとる。

今回の妖魔の討伐にもウチが補助として参加しとるんや。けど、今回は危ない仕事やったみたいや。この離れた場所からでも見える巨体で四本の腕を無造作にふるう。それだけで何人もの人間が宙を舞う。

神鳴流剣士は真剣そのものだが、相手は適当に遊んでいる。それほどの妖魔なんや。土蜘蛛は。
やけど、勝てへん相手やない。ウチならできる。できるけど、ウチは一人になるかもしれへん。

「ほのかお嬢様！お逃げ下さい！あれは我らが命を賭して、倒します。あれを京の地へ入れるわけにはいきません！」

「……」

「お嬢様！」

「…ここで死ぬんやったら、ウチにその命、くれへん？」

「何をなさるつもりで？」

「都落とし。」

「……我らの力を起点にしても、無理でしょう。」

「それだけやない。都喰らいてもって、奴を喰らう。」

「…それが、何を意味するものかわかっておいでですか？」

「ウチは近衛　ほのかや。京の地を守護する陰陽寮の跡継ぎや。それにこのちゃんもおる。」

それを言うと周りを見る。周りの者はウチの決意を理解してくれたんか、頷く。

「「我ら一同の命！ほのかお嬢様に捧げます！どうか、京の地をお願い致します！」」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

それからの動きは早かった。神鳴流剣士が円を組んで土蜘蛛を攻め立てる。陰陽師は結界を張って自らの氣を高める。

準備が整うと陰陽師たちがウチを見る。ウチが頷くと彼らも頷き返す。

「大祭を持って土蜘蛛を喰らう！そなたらの命はウチが喰らう！」

その時、土蜘蛛がウチを見る。そしてニヤリと笑う。

【ワシを喰らうか？ちょうどいい！退屈していたのだ！貴様には平

穏は無いぞ！ワシを喰らうのだ。】

「ウチはお姉様さえ、幸せならいい！お姉様なら、京の地を任せられる！」

言葉と共に、彼らに施した術式を起動する。

陰陽師たちは内側から破ぜて結界の中の小さな世界が崩れていく。神鳴流剣士もそれに巻き込まれて同じように破ぜていく。最後に土蜘蛛も呑み込む。だが、土蜘蛛はまだ生きている。

「かつて、大祭は僧侶の命を救った。此度はただ喰らうだけ。ウチは次の階位へ進む。土蜘蛛よ。ウチの糧となれ。」

【表側ではそんなことになってるのか？まあいい。ワシを喰らえ。】

「喰らう。」

結界はただの力となり、ウチの中に取り込まれていく。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

まだ八歳！このちゃんの式紙と（前書き）

ちょっと戦闘です。難しいですね。

ほのかｓｉｄｅ

「そんなことがあったか。だが、納得した。大神…お前の言う狼さんにも伝えておく。他の奴らには話さねーように言っとく。あたしは話さねーよ。」

「よろしゅうな。」

「ああ！」

「ついでにウチに修行つけてくれへん？精神的に。」

「あたしの主には強くなってもらわねーとな！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

このかｓｉｄｅ

式紙は妖魔との契約がメインなるみたいや。今回なら、おっきなっワンちゃん。大神さんっていうらしい。

「……」

「？」

気づいたらワンちゃ…大神さんがうちのことを見とった。

「ん？すまぬな。ほのか嬢の時も思ったのだが、なのかによく似ているのでな。懐かしく思っての。」

「母様？」

「ほのか嬢は話しておらんのか？話すのは嫌いじゃない。」

「聞かせて？」

「うむ。」

大神さんから聞かせてもらった話は母様の小さい頃の話。うちより早く妖魔と会って、遊んだり戦ったり、時には殺したこともあったみたいや。

ほ～ちゃんもせっちゃんもそういうところにおったんやな。

でも、これからは二人と一緒に行くんや！うちが二人を癒やしたる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

それから、大神さんと式紙の契約をして、千草さんから氣を使った術を、大神さんからは魔力を使った術を習った。

うちは氣より魔力の方が断然多いようで、大神さんの修行がメインになった。千草さんはうちに教えれへんのがショックなんか、妖怪さん達とやけ酒しとるみたいや。

んで、大神さんの修行なんやけど、うちは直接的な攻撃はあかんみたいや。でも間接的にはできるらしい。

例えば、召喚術やったら攻撃できる。でも、攻撃するっていう気持ちが入るあかんみたいや。ほ～ちゃんやせっちゃんを守るんや！って感じなら、まだましやった。

でも、それ以外は順調や。千草さんに教えてもろた結界術を大神

さんが魔力でも使えるようにしてくれ。おかげで、これは早く終わりそうな感じや！

せっちゃん、一人で大丈夫やれか？ほ～ちゃんも寂しがりやけど、せっちゃんもほ～ちゃんほどやないけど寂しがりやさんやし。

まあ、ほ～ちゃんは急に寂しがりやさんになるからうちが見といたらなあかん。うち、お姉ちゃんやもん！

この島に来て半年くらい経った。ときどき、外に出たりはしとるけど、ほとんど島におる。ほ～ちゃんとは三日に一回くらい会っとる。

修行は術は基本的なことは教えてもろて、今は反復練習しとる。後は実戦で調整するみたいや。

で、修行の中心は体力づくりをやっとる。ちゃんとした修行は家で神鳴流をやるらしい。せっちゃんとの修行やな！

「千草さん。ほ～ちゃんって神鳴流は使えるん？」

「ほのかお嬢様どすか？…う～ん　、鶴子はんの見立てやと小太刀との相性が良いらしいどす。腕前は神鳴流でも上位な入るとか入らないとか。」

「ありがとうな！」

「いえ、おやすいご用どす。」

がんばって修行せなあかんな！

ーーーーーーーーーーーーーー

修行は終盤や！ほ～ちゃんとせっちゃんと合流して、暴れとる妖魔を退治するんや。

うちらの見届け役で千草さんもついてきとる。
暴れとる妖魔は鬼さんや。数は十くらい。
相手が気づいてへんからうちの術で先手必勝や！
「召雷！」
お札に魔力を流して、術を発動する。すかさず、せっちゃんが翼を広げて妖魔の集団に突っ込む。
「神鳴流　百花繚乱！」
うちの雷で相手が硬直したところをせっちゃんの剣技でかき乱す。
「せっちゃん！」
「うん！」
ほ～ちゃんの声でせっちゃんが飛び上がった。
「方違え　弐の法！因果狂い！」
ほ～ちゃんの術が決まったら相手の体がねじれたりしとる。
「神鳴流奥義　雷鳴剣！」
最後にせっちゃんの一撃が妖魔を滅した。その後、二人を癒やして島に戻った。

九歳！詠春の変化と（前書き）

スランプ気味です。久しぶりの投稿です。おまかせしてしまって申し訳ありません。

九歳！詠春の変化と

詠春ｓｉｄｅ

先日、このかから麻帆良へ戻る時にほのかや刹那君に麻帆良での友達を紹介したいと頼まれた。私個人としてはかまわないのだろうが、このかに裏のことを話した際に、組織の長としてもきちんと考えるように改めさせられたところだ。

ここは最近話すようになった一条殿に相談に乗ってもらうことにする。

一条殿が来て今回のことについて話すとおもむろに口を開いた。

「まずは長殿の意見を聞きたい。」

「私はこのかの話に乗ろうと考えています。」

「乗る、と？」

「はい。このか達の護衛として一条殿にお願いしたい。」

「ふむ。内部に対しては長殿が歩みよったと考えるが、魔法協会はどう思うかの。」

「最終的にほのかも麻帆良へ行かせるための立場ある人間の視察と道中の護衛でいきます。あそこには闇の福音もいるのです。過激派の意見を聞いたとしてもいいでしょう。」

「護衛はわしが決めてもいいのか？」

「はい。先鋭でお願いします。」

「良かろう。では本命についてじゃか…」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

ほのかｓｉｄｅ

最近、日課になってきとる瞑想。やってみると自分の中の土蜘蛛の力を把握できるし、周りの気配もよくわかる。だから、危ない気配を出して近づいてくる月詠のことも気づいてる。

「月詠。もうちょっと狂気を抑えへんとバレバレやよ？」

「あー、見つかってしまいましたな～。」

そういうと狂気を鎮めてウチの前に座る。やけど、隙を見せたら襲ってくるから、いつでも動けるようにする。

「今日はせっちゃんと一緒やないん？」

「さっきまで一緒やったんですけど、このかお嬢様にほのかお嬢様を呼んでくるように頼まれたんどす～！」

「このちゃんに？」

「はい～。」

「なら、一緒に行こか。月詠はせっちゃんと殺り合いたいやろし。」

「先輩と…。」

トリップしとる月詠を引っ張りながらせっちゃんに心の中で謝る。

（ごめんな。月詠は任せる！）

月詠にこのちゃんの場所を聞きながら行くと、このちゃんにいじられて顔を赤らめたせっちゃんがいた。

「このちゃん。」

「ほ～ちゃん！良いこと思いついたんや！」

「良いこと？」

「そうや！春休みのあいだに麻帆良に戻るんやけど、ほ～ちゃんとせっちゃんに向こうの友達だち、紹介したいんや。でな、うち、父様にお願いしたんや。

どうやろか？」

せっちゃんには先に話してたようで、うんうんと頷いとる。せっちゃんはＯＫ言うことやろう。

「ウチもＯＫやよ。あ、月詠も行かへん？」

「うちもいいんどすか～？」

「もちろんや。父様の出方によってはいろいろありそうやし。」

「そっちも狙っとる？」

「当然やよ。うちもこの一年で変わったんや！父様も変わったはず

や！」
このちゃんの言う通りに父様も変わった。一条さんともよく話すようになって、呪術協会の事を一番に考えるようになった。

今回の事で水面下では大きく動くはずや。動かんだらウチが麻帆良で結界八卦の術式を仕掛けやなあかん。
結界八卦を仕掛けとくと、襲撃がしやすくなるし、ひとつの方位での方違えも出来る。どっちにしても仕掛けた方がええやろか。要相談やな。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

せっちゃんと月詠が修行に行くと、このちゃんと二人になる時間ができた。二人の部屋に戻って、ひと息つく。

「ほ～ちゃん。」
ふいにこのちゃんがウチに寄りかかってきた。ウチもこのちゃんに寄りかかって返事をする。

「んー？」

「二人っきりって久しぶりやな～。」

「そう…かも。」

「ほ～ちゃん。うちはずっとほ～ちゃんの味方やよ。」

「？」

「ほ～ちゃんは寂しがりで甘えん坊で、うちを一番に考えてくれる。けど、うちかてほ～ちゃんのこと大切に思うとるんや。うちにもほ

～ちゃんのこと背負わせてくれへん？」

「…あ。」

気が抜けてたところにこのちゃんの優しい言葉に思わず声が漏れた。

「話してくれへん？」

結論から言うと全部話してしもた。土蜘蛛のこと、それを倒すために仲間の人を喰らうてしまったこと。ウチが不老に近くなったこと。

「うちはほ～ちゃんと一緒におるよ。うちかて、修行に勉強しとるんや。外氣を身体に慣らしたらほ～ちゃんと一緒や。

うち、がんはるえ？」

「…ぐす。

ありがとーな。ウチ、このちゃんと一緒にいたい。やからウチも外氣のこと勉強する。」

「うん！」

九歳！詠春の変化と（後書き）

今後の展開として、超ルート。フェイトルート。原作改変しながらも準拠ルートを考えております。

十二歳！中学一年生。このちゃんとせっちゃんとウチ。（前書き）

お待たせしました。これからは十二歳！の話が続きます。お楽しみください。

十二歳！中学一年生。このちゃんとせっちゃんとウチ。

ほのかｓｉｄｅ

このちゃんにいろいろ告白してから三年。ウチとせっちゃんも麻帆良で過ごすことになった。

このちゃんと約束したずっと一緒に居ることは一応、うまくいった。外氣の取り込みは失敗したんや。けど、それをヒントに新しい方法で成功した。

そもそも氣というのは生き物の活動に必要な力や。外氣を取り込もうとすると大気中の魔力も取り込んでしまう。魔力っていうのは、大気中にうっすらとあって、体内の魔力と反応させることでいろんな現象を起こす。やから、大気中に魔力がないと発動せーへんわけや。

で、外氣っていうのは星の氣なんや。その外氣だけを取り込むことで仙人みたいに不老みたいになれる。

それには、特殊な体質と長い修行が必要で、ウチらには無理やった。

そこで、ウチらの家に目を付けたんや。関西呪術協会は京の龍脈の上にある。龍脈は大地の力が流れる道で、関西呪術協会はその力が溢れる場所でもある。

そこで、近衛家の次期頭首で関西呪術協会の次期長として、京の地の龍脈と契約することにした。

でも、このちゃん一人やと氣が足りひんかった。ウチとこのちゃんの二人で龍脈に舞を奉納して、ウチの氣とこのちゃんの魔力を合成して、擬似的に緘卦法を作り上げて契約を果たした。

これを今年のお正月にしたんや。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

三年前にこのちゃんと麻帆良に来た時は明日菜ちゃんと長谷川千雨ちゃんと和泉　亜子ちゃんと仲良くなった。同い年やし同じクラスになったらええんやけど。

まずはこのちゃんのとこ行って、おじいちゃんのとこやな。さっきからせっちゃんがこのちゃんに会いたくてうずうずしとる。早く行かなな。

待ち合わせ場所は世界樹広場。父様の話しやとおじいちゃんは夜の警備員を欲しがっとるらしい。表向き、裏のことを知っとるウチら二人にその仕事を頼んでくる確率が高いらしい。

このちゃんには裏のことは知られてへん設定になっとる。いつもは認識阻害のお札を持っとるようや。

で、何か言いたいかと言うと、世界樹広場が裏の集合場所になる。まあ、このちゃんがいろんな仕掛けをしとるらしいから、下見になるだけやけど。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

世界樹広場にはこのちゃんと明日菜ちゃんと千雨ちゃんがおる。

「「このちゃん！」」

ウチらの声が重なった。向こうも気づいて、手を振る。

「ほ～ちゃん、せっちゃん、３ヶ月ぶりやな～。」

「千雨ちゃんと明日菜ちゃんも久しぶり。」

「うん、久しぶり。だけど、呼び捨てでいいわよ。なんかこそばいから。」

「了〜解。三年ぶりやね？」

「ん。ああ、そうだな。私もこの三年でなんとか整理できた。相談に乗ってくれてありがとな。」

「友達やからね。」

「あと私はほのかとはルームメイトだからな。よろしく。」

「うん。和風コーデも持ってきたから、大丈夫やよ？」

「お！楽しみにしてる。」

このちゃん達と合流すると一旦女子寮に行って、荷物の整理をしてから談話室に集まった。

「あれ？千雨ちゃんは？」

「この後はおじいちゃんのとこ行ってまたここに戻ってくることになるから、ウチの荷物の整理、やっといてくれるんや。」

「あー、あたしには無理ね。整理とか苦手だし。」

「せっちゃんも挨拶できた？」

「うん。いい人やった。けど…」

「けど？」

「負けた。」

「あー、龍宮さん綺麗だもんね。」

少し落ち込んだせっちゃんを明日菜が慰めた。

「おじいちゃんは女子中等部の学園長室やから、通学路の案内にもなるからよく覚えておくんやよ？ほな、行こか～。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

学園長室にはこのちゃんの後に続いて入る。

「おじいちゃん。連れてきたえ。」

「フォフォフォ、よく来たの。」

「うん。久しぶり。」

「お、お久しぶりです。」

せっちゃんは怯えたように、ウチの後ろに隠れながら挨拶をする。

「…せっちゃんはまだアカンのやな～。ほ～ちゃんは大丈夫なん？」

「ウチは大丈夫やよ。」

「刹那ちゃんはどうしたの？」

事情の知らない明日菜がこのちゃんに聞く。けど、うなだれとるおじいちゃんを見て、言うべきか悩んどる。

「明日菜。ウチが教えるえ。」

で、裏の事情を省いて説明した。ウチらが小さいころ、三人である映画を見とったんやけど、次の日に突然おじいちゃんが来たもんやから、ウチらがパニックになったことがあった。

ちなみに映画はエイリアンや。

「あー。うん。そうね。」

さすがに明日菜も本人の前では歯切れが悪い。

しばらくしておじいちゃんが立ち直った。

「うむ。このかに明日菜くん。案内ご苦労じゃった。二人には入学などについて説明をするからの。」

「うちらは外で待っとるから。」

「すまんのぉ。」

二人が出て行くと部屋に結界が張られる。

「うむ。二人には裏のことでお願いがあるんじゃ。この学園は様々な侵入者が来る。このかを狙ってくることもあるんじゃ。

そこで、二人には夜間の警備に参加してほしいんじゃ。もちろん報酬も出す。どうじゃろうか？」

「おことわりします。」

「フォッ！？じゃかほのかやこのかを守る為には侵入を防ぐのが一番じゃろう？」

「このちゃんもほ～ちゃんもうちがそばで守るんや！」

「ウチもせっちゃんに危ないことしてほしくないえ？ても、危ない時に、気が向いたら手伝ってもええよ。」

「ほ～ちゃん！？」

「暇つぶしのストレス解消にならええと思わへん？」

「それくらいならうちもええ。」

「ううむ。緊急時は頼むとするかの。それと、今夜の２３時に世界樹広場に来てくれんかの。魔法先生達に紹介したいのでな。」

「それくらいならええよ。せっちゃんは？」

「…葛葉　刀子さんも来られるんですか？」

「うむ。」

「なら行きます。」

その後は麻帆良の話を聞いて、学園長室を後にして、このちゃん達に学校を案内してもらって寮で解散。
千雨ちゃんと夕食食べたり、コスプレ談義して、学園長室での話をした。もちろん裏のことは三年前に話してある。

「んで、どうするつもりなんだ？」

「言った通り、暇つぶしやよ？」

「ならいい。でも、危なくなったら転移符で逃げろよ？私もストックがあるからな。」

そういえば、前に白紙のお札をたくさん渡した覚えがある。

「転移符は高く売れるから、それを元手にさらに増やしてるしな。」

「さすが千雨ちゃん。術も使えるん？」

「教えてもらったのは、できるようになったな。ほのかは私の親友だしな。（ぼそ）」

「はうっ。」

小さい声だったけど聞こえた。二人で赤くなった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

十二歳！中学一年生。このちゃんとせっちゃんとウチ。（後書き）

まずは超ルート！ルート変更は十二歳！の話が分岐点。後、超ルートは通常版でいきます。他のルートは未だに穴だらけで、外伝風味。

今のところは、ですが。

これからもよろしくお願いします！

十二歳！集まりと学校で妖刀と幼女。（前書き）

戦闘は難しいです。口調も難しい。
がんばります。

十二歳！集まりと学校で妖刀と幼女。

学園長ｓｉｄｅ

ほのか達が出て行くのを確認すると、ため息をつく。正直、ほのかには断られることは予想しておったが、刹那くんにも断られるとは思わんかったの。じゃが、まだチャンスはある。夜の集まりでなし崩し的にできるかもしれん。

しかし、問題はほのかじゃ。一条の奴と仲がいいらしい。あいつは昔からわしのすることにいちゃもんつけおってからに。

じゃが、軽く見る訳にはいかん。奴ほど慎重で尻尾を見せん者はおらん。関西の過激派が未だに体裁を保っておるのはあ奴の力じゃ

とにかく、夜じゃ。これがだめでもまだ時間はあるんじゃ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

世界樹広場にはすでに多数の魔法先生や魔法生徒が集まっておる。

「学園長、今回は何人来るのですか？」

「うむ。皆もわかっている通り今回は新入生の魔法生徒じゃ。戦力として期待できるのは今のところ一人じゃが。」

「誰かが師についているのですか？」

代表として質問するのは色黒でメガネのガンドルフィーニ君じゃ。優秀であるがまだ若いと言うのがわしの認識じゃな。もう少しタカミチ君のように落ち着いてほしいところじゃ。

タカミチ君にも問題はあるが、今のところは大丈夫じゃろう。

「実力については問題ないのじゃが…、ふむ。来たようじゃな。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ほのかｓｉｄｅ

寮から出るとせっちゃんの他にもう一人の人影があった。

「来たようだな。私は桜咲の同室の龍宮　真名だ。よろしく頼む。」

「んー。たつみー？マナ？…あだ名はこのちゃんに任せるとして。あらためてマナ？ウチは近衛　ほのかや。よろしゅうな。ウチはほのかでもほ～ちゃんでもええよ。」

「私はマナでいいよ。」

「ま、マナ！うちも刹那でいい！」

せっちゃん、意外に人見知りやから、挨拶も最低限しかできてへんかったんかもしれへん。

「ああ。刹那、よろしく頼む。そろそろ行くか。」

「そやね。」

世界樹広場に着くと、おじいちゃんが皆にウチらのことを紹介する。マナは傭兵らしい。

で、ウチらのことを説明したらガングロメガネや他多数が激昂し

た。

「君達は力があるというのに、その力を使わない気か！？力があるのなら、弱きもののために力をふるうべきだ！！！」

「そうですわ！私たちは正義のために力を尽くすべきなのです！」

ガングロメガネに合わせて、金髪のお姉さんが続いた。

「守護の意味を理解してない人の話は聞くだけ無駄や。」

「何ですって！？動こうとしない貴女方に言われたくありませんわ！」

周りの魔法使いも頷いているということは理解してへんらしい。厳ついサングラスのヒゲの人や関東に結婚を求めて来た刀子さんは理解しているみたいや。

刀子さんがまだ働いているということは、逃げられたんやな。なんかこっち見とるけど、後回しや。

「麻帆良を狙ってくる存在は一般人を目当てにしてへんみたいやけど？」

「何がいいたいんですの！」

「ホントに守護したいんなら裏の関係者だけでいいと思うえ？わざわざ一般人を盾にせーへんでもええんちゃう？」

「そんな事ありませんわ！私たちは正義のために戦っているのです！」

「おじいちゃん？ウチらにこんな人と働け言うん？このちゃんに手を出すような考え方するような人と。」

「うむ。今回は顔合わせと腕試しがメインじゃ！各々の主義主張は後ほど話し合えば良い！

では龍宮君と、ふむ。ガンドルフィーニ君に。

刹那くんは刀子君にお願いしようかの。」

「「わかりました。」」

「ほのかとは…」

「私が相手をしますわ！」

「では高音君に頼もう。」

金髪さんは高音さんというらしい。

「私が勝ったらちゃんと働いてもらいますわ！」

「ウチが勝ったら好きにしてええん？」

「構いませんわ！私が負けるはずがありませんもの！」

「おじいちゃんもそれでええ？」

「良かろう。じゃが、負けた時はきちんと働いてもらうぞ？」

「かまへんよ。」

まずはマナとガングロメガネ…やなくてガンドルフィーニ先生。どちらも手加減してマナの勝ち。どちらにしてもマナの勝ちやと思う。

次はせっちゃんと刀子さん。せっちゃんも善戦したけど、負けてしもうた。翼を使ったら勝てたかもしれへん。氣の量も変わってくるし。

次はウチやな。

「私の繰影術の前では貴女に勝ち目はありませんわ！『黒依の夜想曲』」

「ウチはこれで。召移・妖刀ひめ。」

この妖刀ひめは妖刀ひなの雛型。つまりひなの原型。

で、この二つ妖刀は共鳴しあって互いの性質を伝え合う。つまり、ひな＝ひめということや。

ちなみに、ひめはウチを主と認めとる。

「でははじめ！」

合図とともに、影の槍が牽制として仕掛けてくる。ウチが後方に避けると彼女の後ろに表れた人形の右ストレート。

それは瞬動で空へ舞うことで避ける。

「神鳴流　黒刀　極大　雷光剣　弐の太刀」

夜の闇の中でも黒い雷光が周りの影人形を消し去り、なおかつ、周囲には被害が全くない。黒い雷光の中心には目を回した高音さんのみ。

「そ、そこまでじゃ！」

おじいちゃんの声で数人が高音さんに駆け寄る。

ウチのところにはせっちゃんとマナと金髪幼女とロボ。

「ほ～ちゃん、やりすぎや。」

「しかし、みごとなものだな。一緒に戦えないのは惜しい。」

「ウチもせっちゃんも気が向いたら行くんやけど。」

「では、楽しみにしておこう。」

「で、そっちは誰なん？」

せっちゃんとマナは挨拶を済ませているのか知っているようだ。

「うむ！わたしはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！悪の魔法使いだ！」

「私はマスターの従者の絡繰　茶々丸です。」

「近衛　ほのか！お前をわたしの家に招待しする！」

それだけ言うと高笑いしながら歩き去る。その後茶々丸さんから地図をもらった。

「では私はこれて。」

茶々丸さんも金髪幼女の後を追う。

「かわいい子やね？」

「そういう時期なんかな？」

「いや、あれは真面目に本物だ。」

「「！」」

「ほ～ちゃん、ほ～ちゃんはああなったらあかんえ！」

「大丈夫や！それにウチも治癒術は使えるから、ちゃんと治したる。」

「うん。念のためにうち、このちゃんも連れて行く。」

「なら、寮の前に朝に集合や！」

「いや…、まあいいか。」

十二歳！集まりと学校で妖刀と幼女。（後書き）

次回はエヴァちゃん。教室まで行けるかな？微妙です。

十二歳！エヴァちゃんのお家でこのちゃんの恐怖？（前書き）

うーん、難しいです。
設定では超は一月にはきていることにしました。もう少し固い感じが良かったかなとも思いましたが、このままいきます。

十二歳！エヴァちゃんのお家でこのちゃんの恐怖？

千雨ｓｉｄｅ

ほのかと初めて会ったのは三年前のことだ。同じ組のこのか（当時は近衛と呼んでいる）とサイドテールの子と歩いているのを見かけた時に、ほのかとも目があった。

その後、なし崩し的に一緒にいろんな所を周り、休憩したときに麻帆良の愚痴をこぼした。そこでこの学園の秘密を知った。

昨日の夜もそれに関係する集まりに行って、金髪幼女にお呼ばれしたみたいだ。

「なあ、ほのか。」

「へ？」

「本当に大丈夫なのか？」

「このちゃんもせっちゃんもいるから大丈夫やと思うんやけど。」

そうは言うが心配なのは心配なんだ。聞くところによると、変な幼女らしい。

「私も行く！」

「へ？」

「転移符はかなりあるし、何よりもほのかが心配だ。私も行く。」

「千雨ちゃんが来てくれるんやったら安心やね。変な幼女やし。」

刹那ｓｉｄｅ

麻帆良は本当に大丈夫なんやろか？昔ならともかく、今はほ～ちゃんの近接戦闘はいざというときのものでしかない。

それに負けるだけならともかく、周りの反応がありえへん。

このちゃんに報告すると、このちゃんも呆れとる。

「う～ん。警備のことは大丈夫やと思うんやけど、その、金髪幼女？」

「うん。ほ～ちゃんだけに行かせるんはいややから、うちとこのちゃんも行ったほうがええかなって。」

「そ～やね。いざ、というときにはせっちゃんが必要やし、治癒はうちがしたほうがええもんな。うん。うちらも行こか。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ほのかｓｉｄｅ

千雨ちゃんとせっちゃんとこのちゃんで金髪幼女、えっと、エヴァンジェリンちゃんに指定された場所にやってきた。

麻帆良の端の森の中にある豪華なログハウス。気配は三つ。エヴァンジェリンちゃんと茶々丸さんと小さな微弱な気配。

「よし。ほのか。いつでも逃げることができるぞ？」

「千雨さん。大丈夫やと思いますよ。殺気は感じへんし。」

「そ～やね。エヴァンジェリンちゃんも聞いた話やとかわいいらしいし、性格をちゃんとすれば、ええ子やと思うんや。」

「三人とも、エヴァンジェリンちゃんもともだちになりたいだけかもしれへんし、身構えんと行こ？」

「「「そ～やね（わかった。）」」」

で、ドアをノックすると、茶々丸さんが出迎えてくれて中に入れてくれた。中に入るとエヴァンジェリンちゃんがこちらを睨んでいる。それもかわいいんやけどね。

「きさまら～！あれはわざとか！？わざとなんだな？」

「あ～ん！かわええ！」

このちゃんが縮地でエヴァンジェリンちゃんの後ろをとって、抱きかかえる。

「なっ！！？は、離せー！」

「エヴァちん、かわええな～。」

「録画中。録画中。」

茶々丸さんも助けようとはしない。ウチらも見とることしかできへん。

「あ。茶々丸さん。座って待っとてもええ？」
「はい。どうぞおかけください。お茶をお持ちしますね。」

このちゃんが存分に堪能して、エヴァンジェリンちゃんは解放された。

「……ひどい目にあった。というか呼んだのは近衛　ほのかだけだったはずだ！そもそも、近衛　このかと長谷川　千雨！きさまらも関係者か！？」

「そやね～。」

「私もだ。」

「しかし、いや、わたしは特に困らんか。
まあいい、ここに呼んだのは近衛　ほのかの実力が見たかったからだ。」

「本気でできるとこはないんちゃう？」

「エヴァちんも変な術で動きにくそうやし。」

このちゃんの言葉にエヴァンジェリンちゃんが目を見張る。

「…忌まわしい術でな。しかし、別荘がある。そこなら、全力とまではいかなくとも戦える。」

「「「「別荘？」」」」

「ついてこればわかる。」

エヴァンジェリンちゃんの案内でログハウスの地下にあたる場所に来ると、一抱えほどあるガラス玉がある。しばらくすると足下に魔法陣が現れて、景色が変わる。

「ようこそ、わたしの別荘へ。」

エヴァンジェリンちゃんが不敵に笑う。

目の前には南国の海と白磁の城が存在していた。

十二歳！エヴァちゃんのお家でこのちゃんの恐怖？（後書き）

次回は合体攻撃です。

十二歳！エヴァちんを三人で！（前書き）

遅くなりまして、申し訳ございません。

オリジナル符術でエヴァちゃんと対決です。

十二歳！エヴァちんを三人で！

ほのかｓｉｄｅ

話を聞いてると、エヴァンジェリンちゃん……エヴァちゃんでええかな？で、そのエヴァちゃんは真祖の吸血鬼で６００年もいきとるらしい。

昔の従者はいつの間にかこのちゃんが抱っこしとるチャチャゼロ。可愛らしい人形やけど、言葉が物騒や。月詠みたいやな。

このちゃんもエヴァちゃんのこと欲しそうな感じやけど、エヴァちゃんはウチがもらう！

「よし。ここならいいだろう。わたしの全盛期とまではいかないが、お前たちでも十分に戦えるだろう。」

「お前たち？」

「そうだ。こちらはわたしとチャチャゼロ、茶々丸。そちらは戦えそうにない長谷川を抜いた三人だ。」

「ウチはええよ。」

「うちも大丈夫や。」

「うちもそれで。千雨ちゃんはそれでも大丈夫です？」

「ああ。もとより、私は逃げることの為に来たんだしな。」

そういって、離れた場所に腰かける。転移符を取り出して、逃げる準備ができているのはさすがだ。

「そうだな。もしわたしたちに勝てたら一つだけ言うことを聞いてやろう。」

「じゃあ、ウチの式紙になってくれへん？」

「あ、うちもエヴァちゃん欲しい！」

「何？」

少しだけエヴァちゃんが殺気立った。

「そのかわり、エヴァちゃんが勝ったら、エヴァちゃんの呪いを解呪する！後、式紙っていうのもウチとこのちゃんが関西の長になったら守り神になってくれへんかな～って思ってな。」

「な！？で、できるのか！？できるのなら守り神になってやろう。フフフ、ハッハハ！関西の本拠地は京都だろう！

いいだろう！だが、勝負とは関係なく呪いは解け。そのかわり、守り神になってやる！」

千雨ちゃんの方を見ると急にテンションの上がったエヴァちゃんに引いとる。このちゃんは抱きしめたくてうずうずしとる。せっちゃんはなにやら、考えとる感じ。茶々丸さんは録画中やな。

「うん。ウチもその方ええし。あ、このちゃんと千雨ちゃんのことは学園には黙っといて欲しいんやけど…。」

「かまわん。正義の魔法使い共にわざわざ、戦力を教えるつもりはない。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

戦いの始まりはエヴァちゃんの詠唱。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！魔法の射手、氷の三十七矢！」

「っ！方違え・壱の方！」

「うちも行くえ～。五枚符術・京都大文字焼き・回！」

このちゃんの術がエヴァちゃんの魔法を飲み込んでエヴァちゃん達を分断した。

すかさず、せっちゃんはチャチャゼロと剣を交える。このちゃんは茶々丸に間合いを取りながら釘付けにする。ウチはエヴァちゃんとや。

「やるではないか。しかし、甘いな！闇の吹雪！」

「東海青龍王の名の下に、木符！」

闇の吹雪がウチに届く寸前に重力の球が闇の吹雪を押し潰す。

「南海紅龍王の名の下に、火符！」

火符と言う名ではあるけど、エヴァちゃんには人の頭ほどの大き

さの氷が飛来する。

「ッ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来たれ氷精　闇の精
闇を従え吹雪け常世の氷雪　闇の吹雪！」

「遅い！」

完全詠唱魔法で相殺される。さらに、間合い詰めて吸血鬼の力で
殴りかかってきた。しかし、運良く外れる。

「何！？」

完全に捉えたと思った攻撃が外れてエヴァちゃんに隙ができる。

「火符、木符！」

さっきの火符で火炎弾を作り出して弾き飛ばす。そして、木符で
叩きつける。

「かはっ！？手加減していては勝てんか！魔法の射手、氷の百一矢
！」

それを弾幕に距離を取る。

「契約に従い、我に従え氷の女王、来たれ、」

「西海白龍王の名の下に、来たれ金符！」

「『とこしえのやみ、えいえんひょうが！』」

「金符、火符！連結！『火炎旋風！』

ーーーーーーーーーーーーーーーーー
刹那ｓｉｄｅ

うちが対峙しているのは一見、かわいらしいビスクドールやけど、その両手には使い込まれたナイフが握られている。不安定にも見えるけど、本気でやらな、殺られる。

「ケケケケッ！ジュンビハイイカ？ナラ、キリキザマレロ！」

「はあっ！」

チャチャゼロと切り結びながら、夕凪に妖気を纏わせる。妖気は氣とは違って柔軟性に優れている。うちは半妖ということを利用して妖気での連撃と氣での一撃を使い分ける。

「ヒサシブリニタノシメソウダゼ。」

「言ってろ！」

しかし、切り結びあっているうちに、うちらでの戦いでは決着がつかないことがわかった。互いに攻めきれず、どちらかの援護が来た時に決着がつく。しばらくはこのままやな。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー
このかｓｉｄｅ

うちらの戦いは茶々丸はんがうちに符術を使わせへんように、距離を詰めて戦い、うちは詠唱のいらない簡易符術で対抗する感じや。

「茶々丸はんはロボなん？」

「正確にはガイノイドです。」

「なら、もっと経験積まな、な？」

「？」

「お札は再利用できるんよ？龍王を支えし乙女よ！太真王夫人の名の下に、結界術・祭！」

うちが使っとったお札が茶々丸はんの周りに漂って、特殊な封印結界を作り出す。

「これは…」

「京都のお祭りにちなんだ符術でないと解けへんようになっとるんや。」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

ほのかｓｉｄｅ

高威力どうしぬ激突で視界が遮られた。これが戦闘ならまだ続くんやろーけど、これは模擬戦や。その証拠にエヴァちゃんも闘気をおさめとる。

「ふん！まだ隠し玉があるようだが、まあいい。それに他もこれ以上はおもしろくない。」

エヴァちゃんの言うとおり、せっちゃんとチャチャゼロは膠着状態で、このちゃんは一人勝ちやな。

一旦、一息ついて、今度はエヴァちゃんの封印解除とウチとの契約や。頑張らな、な。

十二歳！エヴァちんを三人で！（後書き）

次回こそは合体攻撃かな？

十二歳！神鳴流秘奥！（前書き）

遅れました。次話は早めに出したいです。

十二歳！神鳴流秘奥！

ほのかｓｉｄｅ

エヴァちゃん達との模擬戦が終わって、一息ついたところでエヴァちゃんのお城の石造りの庭園に来とる。

エヴァちゃんを中心にウチとこのちゃん、せっちゃんで１メートルくらい周りを囲む。

千雨ちゃんはチャチャゼロを抱きかかえて何か話しとる。残念ながら、ここからじゃ聞こえへんけど。

「ほな、いくえ～。ほ～ちゃんもせっちゃんも準備ええ？」

「うちの修行の成果を見したる！」

「ウチも大丈夫やよ。陰陽師・神鳴流の本来の仕事やね？」

「そうやね～。じゃあ、やるえ。まずは楔や。」

「「「楔・九字法！」」」

『臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前。』

九字を切りながら符を飛ばす。符はエヴァちゃんに当たる寸前に障壁ではない、何かに阻まれる。

それこそが呪いで符は呪いに張り付いた。

「む。これが呪いか。」

エヴァちゃんが呪いを視覚的に自覚したことによって、呪いの姿が現れる。それは鎖の姿でエヴァちゃんを縛り付けとる。

しかも、亀甲縛り。

「な、な、な、ナギーー！！！？」

「ーーーーっ！」

エヴァちゃんとせっちゃんが顔を真っ赤にする。せっちゃんは解呪の途中やから目を背けれへん。エヴァちゃんは視姦プレイみたいやから、きついやろうな。

「せっちゃん！このちゃん！いくえ！」

「うん！」

「あ、うん！！」

『神鳴流秘奥！楔切り・滅呪斬弐の太刀！』

全く同じ間合い、同じ呼吸で九字法で打ち込んだ楔に斬りつける。退魔の太刀である弐の太刀は呪い自体を切り裂く。しかし呪いは悪辣で、そのぐらいなら修復する。やからウチらは楔を打ち込んだんや。

楔は使い方によって変わるけど、今回は呪いの余裕部分に打ち込んで、強度を上げた。その部分を切ったことによって呪い自体のバランスが崩れて、崩壊した。こっちも弐の太刀で呪い自体を弱めと

いたからできたことや。

「ふ、ふふふ、ハーッハッハッハー！解けた！呪いが解けたぞ！」

エヴァちゃんも結界が壊れたことを確認できたのか、すごいはしゃいどる。

ウチらは呪いを切り裂くために使った氣の量が多く、へたり込んどる。

「せっちゃん、大丈夫？」

「うん。うちは大技で慣れとるから。このちゃんは？　」

「うちも大丈夫や。ほ～ちゃんより少ないゆ～ても、普通よりは多いしな。」

少し休んだあと、エヴァちゃんが口を開く。

「そういえば、式紙の契約と言うのはどうするんだ？」

「特殊な術式を描いた符に一緒に魔力を流せばおっけーやよ。氣でも可や。」

「それはすぐに用意できるのか？」

「まさに、こんなこともあろうかと、だ。ほのかたちが戦っている間に作っておいた。」

千雨ちゃんが符を三枚も見せる。

式紙の契約に使う符というのは特殊な符に魔力も氣も一切を排除して術式を描かないといけないからかなり難しいはずなんやけど、さすが千雨ちゃんやな。

「ふむ。では魔力ですると？」

「うん。」

ウチとエヴァちゃんで符を持って、魔力を流す。符が光って、それが収まって契約終了。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そのあと茶々丸さんに夕食をごちそうになって、寮に戻った。

十二歳！神鳴流秘奥！（後書き）

次回はエヴァちゃんと学園長と入学式。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7251t/

ネギま！でこのかの妹に!?

2011年10月4日00時15分発行